〔韓国のやきもの展によせて〕

館蔵「鉄砂青花葡萄文大壺」の周辺

アナトリア原産の葡萄は、ヘレニズム時代の中近東で、豊穣の神・バッコスと結びつき、その象徴とされました。また、早くからイーラーン高原で栽培され、月の聖樹・ハマオとして信仰されました。やがて、ハマオの精霊とバッコスとは同一視されるようになり、豊穣と月とが葡萄の基本イメージを成すこととなりました。葡萄の東アジアへの普及は、まず、中国に伝わることから始まります。葡萄の美術の普及も同様です。

「鉄砂青花葡萄文大壺」は、朝鮮時代・17世紀の作品です。口部のすぐ下から葡萄が一枝、蔓を伸ばしています。青花による葉脈を除き、総体鉄砂で描かれています。その黒褐色の発色は、水墨で葡萄を描く「墨葡萄」の伝統を承けていましょう。画技は高く、細部まで丁寧に描かれています。朝鮮時代では、図画署の画員がやきものの絵付けを担うことがありました。本品も、そうした専門画家の関与も想定されましょう。

「日観の墨葡萄」と言うように、墨葡萄はそれを良くした日観を想起させます。日観は中国・宋末元初の禅僧です。江蘇省華亭の出身で、西湖周辺で放浪生活を送りました。草書に優れ、その法をもって葡萄を描き、同時代以来文人から高く評価され続けました。彼の画事は文人墨戯の範疇に入ります。

中国での葡萄の造形化は、南北朝時代には遡ります。ただし、まずは唐草文の形で現れ、生態の描写は北宋時代に入ってからとされています。『宣和画譜』(1120年序)には、葡萄を描いた北宋時代の画家として、趙昌と易元吉の名がみえます。彼らは、自然主義に基づく写実的な態度をもって花卉を描きました。それは、江南地方で展開する写実性と装飾性とがせめぎあう緻密な描写の草虫画に通ずるものであったとみられ、その趣を伝える作品に、趙昌を学んだ江南出身の画院画家・林椿落款の「葡萄草虫図」(台北故宮博物院)があります。実際、葡萄図には虫を添えた例が多く遺り、草虫画の系譜に繋がるそれが、大きな流れとしてあったことが窺えます。

葡萄が水墨と結びつき、墨葡萄の伝統が形成された要因の一つに、月との関係が挙げられます。詩文を繙くと、月とともに詠んだ例が多くみられ、両者の密接な繋がりが知られます。月は西域で確立した葡萄の基本イメージでもあり、西域からの記憶を揺曳している可能性がありましょう。月光に浮かび上がる葡萄の影。それを写す上で、水墨は実に適しています。なお、墨葡萄には、蔓の配置を、より早くに流行した墨梅で多用される「弓梢」に借りた例が散見されます。それは、葡萄と梅とでは、共通項が多かった為でしょう。龍珠と称される葡萄と万玉と称される梅。秋の寒空にある葡萄と早春の寒空にある梅。そして、月。墨梅と月との緊密な関係は、既に指摘されています。

日観の墨葡萄の真跡は一点を遺すのみで、正確には彼の画技を掴み得ませんが、葡萄図の展開の中における彼の墨葡萄は、特異なものとみられます。高い評価を得て著名になった反面、それを継ぐものは少なく、更なる展開をみせてはいません。或いは、葡萄には、竹・梅・蘭・菊とは異なり高潔な人格が与えられておらず、文人墨戯として高度な発展をとげ難い題材であったことにも依りましょう。

韓国の墨葡萄の存在が判るのは、朝鮮時代から(1392～)です。基本的に、中国の草虫画を基盤に水墨と結びついた表現に多くを負うているとみられます。館蔵の「螺鈿葡萄文衣装箱」(16～17世紀)は、モノクロームという点で墨葡萄に準じますが、蝶や蜂が描き込まれており、草虫画の様子となっています。葉脈や鋸状の葉の縁といった細部が丁寧にあらわされていることは、草虫画の緻密な表現を承けていましょう。韓国の葡萄図の葉は、中国のそれと比べると、裂が深く入り、鋸状の縁も明快に描かれる傾向にあります。中国の葡萄図では、深まりゆく秋の風情を伝えるべく枯れしおれ、裂も縁も不明瞭なものもむしろ多くみられます。殊に、日観の描法と緊密に繋がり得る作例にそれが顕著です。「鉄砂青花葡萄文大壺」の執拗にまで丁寧に描かれた葉の鋸状の縁は、韓国の特徴を端的に示していましょう。また館蔵の李継祐(1574～1646～？)の描く墨葡萄も、枯れゆく風情をみせながら、なお葉の裂や縁が明快にあらわされています。そして、館蔵の「鉄砂葡萄文扁壺」(17世紀)では、簡略な描写であるがゆえ、その特徴が如実に示されることとなります。

韓国では中国よりも、葡萄には、文人が愛ずべき植物としての確かな位置が与えられています。当時一級の文人が葡萄図に関心を抱き(申叔舟：1417～1475：『保閑斎集』巻4・6)、また、竹・梅・蘭等とともに描かれたりもします(金江湖：1527～1579：『璞斎集』)。

韓国絵画は、中国・元時代の文人の画事に大きく負うています。彼らは日観を敬愛していました。日観は他人の依頼に応じた作画をしないといい(李日華『六研斎随筆』)、その性格上、彼の真跡が韓国に数多く流入した可能性は低いでしょう。しかし、文人らの交流を通じて名声が広まることは充分あり得、それが韓国での葡萄の位置づけに反映していると捉えられます。ただし、描くに際しては、より普遍的であった表現から学んだとみられます。　(澤田和人)

鉄砂青花葡萄文大壺　17世紀

螺鈿葡萄文衣裳箱　16～17世紀

葡萄図　李継祐筆　17世紀

鉄砂葡萄文扁壺　17世紀

季刊 美のたより No.127
平成11年5月20日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.